佐藤 尚 中 伝 (8)

A Biography of Shōchū SATŌ, the Founder of
the Juntendo Hospital in Tokyo (8)

小 川 鼎 三*

TEIZO OGAWA, M.D.

大学大博士となる

明治2年12月5日付で尚中は大学大博士となり、維新政府に仕えて大学東校を主宰し、新生日本の医学教育の総帥の地位についた。その年の8月に太政官から佐倉藩へ佐藤舜海(すなわち尚中)の出仕を求める書状がきたが、彼は病気を理由にして出頭しなかった。8月付で佐倉藩佐藤舜海あて「右今般召に相成候ところ不快につき当分御猶予願ひ出候えども開拓において御用之あるにつき不快中に候とも押して至急出府候よう更に御沙汰に相成候こと」との書類が残っているのも、最初の召し出しは8月6日付だったかとおもわれる。

同年の10月20日付で佐倉藩公用人吉見明から開拓使御役所あて「当8月中御達ごさ候ところ同人病氣罷あり候につき其段申上候ところ、猶又今般御猶予の儀別紙の通り」とあり、たびたびの召し出しに尚中は出頭しない、病気もあったろうが、順天堂の後仕末や、薩長政府に対する反感もあったのではないかとおもう。前年の会津戦争のときも彼は官軍の要請に対して養子の進を代理として白河に行かせたのである。

しかし尚中が容易に立ち上らなかった理由を新たな資料が教えてくれた。それは彼の訳著「外科医法外編」の巻7、巻8、第9の尚中自筆と思われる原稿であって、巻7の終りに「己巳(明治2年)10月29日夜業を遂ぐ」とあり、巻8の初めに「己巳10月29日夜起」とある。巻7と巻8とは内

容的にかんがりの区切りがあるが、尚中は前者を書き終えると、その晩に後者の起稿にとりかかっている。そして巻8の終りに「己巳11月6日業を遂ぐ」、巻9の初めに「己巳11月6日起」とあり、やはり1日もその間に休止していない。巻9の終りは「己巳11月8日業を遂ぐ」とある。その激しい勉強ぶりに驚嘆するのである。

そして11月19日に尚中が佐倉藩主堀田正倫(まさとも)のもとに御機嫌うかがいに outward していることは上京のための暇乞いとおもわれ、同月の末に尚中は太田富三、井上寅三(当時13才、後の養子で順天堂副院長の佐藤佐)、駕籠かき辰五郎を連れて、まず渋谷の堀田氏の下屋敷(いまの日本赤十字病院の敷地)に着き、暫くして下谷美倉橋通りの中根屋敷(いまの三井記念病院の在る辺り)で東方に寄る)に移った。

正式に大学大博士の辞令がでて大学東校を主宰することになったのは明治2年12月5日である。翌3年には下谷山本町19番地に移り、佐倉から家族をよびここを住居とした。この場所は和泉橋通り藤堂邸あとの大学東校に甚だ近いのである。

そのあと尚中が大学東校で何をなしたかは私がすでに「佐藤尚中と大学東校」と題して、本誌第9巻第2号(昭和38年8月)第91~98ページに発表したもので、ここでは略する。

東京で私立病院を創める

最初のドイツ人教師ミュレル、ホフマンの両軍医が明治4年8月下旬に来日し、特に上官であるミュレルが全権をふるい、東校の制度を根本的に改革しはじめた。尚中は日本の医学教育における

* 順天堂大学医学部客員教授(医史学)
Professor of Medical History, Juntendo University,
School of Medicine
[Dec., 4, 1973 受付]

自分の能事は一応終ったと考えたのであろう。明治5年9月に文部省の職を退いて、すぐその月から東京本町2丁目に博愛社という小病院に出張して市民の診療に従事した。当時の新聞によると(東京日々新聞第212号、明治5年10月17日、村上一郎の著第276ページより引用)、博愛社主人は橋爪助信、出張の医員は佐藤少典医(尚中)、須田泰嶺、今居元吉、佐々木東洋、宮下慎吾、その他一兩人とある。

また日本橋大伝馬塩町の上州屋という旅館のあとを借りて、病院風に改造し、ここにも尚中ではかけて診療に従事したという。

ついで下谷山本町の住居の真向いで道路を隔てた所に典医の高階家の有する空き地500坪を借りて、尚中は中田と越前屋の両業屋の援助を得て病室約50の2階建て病院をつくり、明治6年2月2日に落成開業式を行なった。これがいわゆる下谷練堀町の順天堂であり、初めて東京の順天堂が生まれたのである。すぐに病室は満員となり、増築を次々になしたが追いつかず、外来患者はいつも200人を越えたという(1日であろう)。練堀町時代に尚中のもつで働いた医者は大滝富三、阿久津資生、榊原元信、西宮清助などであり、会計事務は初め小柴仁兵衛、ついで富岡鉄五郎がこれに当った。看護婦長は杉本カネであった。

湯島の順天堂成る

練堀町の敷地は狭くて、それ以上の増築ができず、また湿潤の地であるから、もっと広くて高燥の土地を探して、現在の湯島の地に3,000坪余りを時価1坪1円で買った。加賀火消屋敷のあとである。明治7年9月建築に着手した。建築監督兼会計主任は尚中の義兄弟にあたる山村惣三郎であった。このとき前加賀藩主の前田家より2万円の大金を借りたが、利子をふくめて明治13年4月に皆済となっている。

明治8年4月3日にその湯島の新病院ができ上って、入院患者66名が練堀町の旧病院からここに移った。

ところが翌4日に尚中は発熱して病勢がすす

み、11日より血痰を混え、13日には多量に咯血した。その上に高熱でときどき譫語する程であった。肺炎と診断されたが、病状がすみ危険が迫ると思われたので、滞欧中の佐藤進に電報を送り、大急ぎで帰国することを促がした。進はその前年ベルリン大学を正規のコースを経て卒業し学位を得たが、さらに外科を研鑽するためウィーン大学のビルロート Theodor Billroth (1829-94) のもとで留学を続けていたのである。進は急挾帰国の途について7月7日に東京に帰着した。

前加賀藩主の前田斎泰が新築成った湯島の順天堂を4月7日に来観し、その記念に「順天堂」と揮毫した大きい額を贈られた。この額は惜しくも大正12年の大震災のとき焼失する。幸いに尚中の病氣は次第に快方にむかい、5月末には外出もできるようになり、6月には療養のため伊香保にゆき、約ひと月そこに滞在した。そのあいだ順天堂の業務は主として佐々木東洋がやり、大滝富三、阿久津資生がそれを助けていた。

佐倉の岡本道庵(1843~1911)はその前に尚中の養子となり、佐藤大道と称したが、明治7年に尚中が隠居した後は佐藤舜海(2代目)を名のり、佐倉順天堂の主人となった。この舜海が上京して養父であり、恩師である尚中の病氣看護に尽したようである。

明治8年7月に佐藤進が6年間の欧州留学を終えて帰国したとき、尚中も元気を回復して出勤できた。進が主に外科を、尚中が主に内科をうけもって湯島の順天堂はそれから繁栄の一途をふみ出したのである。初めは入院患者100名以内で、外来は1日に50~60名ほどであった。尚中の主義によって病院とは称せず、順天堂医院とよんだとおもう。その医院のそばに尚中の住居が設けられ、新帰朝の進は尚中の長女であるシヅ夫人と共にその家に同居していた。そこは湯島5丁目13番地である。

当時の戸籍をみると、尚中が後妻ナホを迎えていたことが確かであるが、何故か「有故附籍」とあり、本当の籍に入れてないことが注目されるし、この「なほ」は東京府元佐久間町商山本利兵

衛の長女と記されている。尚中の3女楽(らく、後に佐藤佐の妻)、3男衛(まもる、城姓をなのる)、4女梅尾(うめお、後に佐藤恒久の妻)、5女幸(さち、後に今泉嘉一郎の妻)、4男福待(ふくまつ、後に写真館を営む)、5男潤家(ますえ、大滝富三の養子となり、順天堂の内科医として医界に重きをなした)は後妻ナホが生んだのであり、前妻サダ病没のあとは、この人がよく家を収め、尚中のこの上なき伴侶であったとおもう。

順天堂医事雑誌の序文

明治8年10月から発行がはじめられた「順天堂医事雑誌」は日本の医事定期刊行物として甚だ古いものである。坪井信良が明治6年から出した「和蘭医事雑誌」はいっそう古いが、内容は外国の医事を抄訳したものであり、「順天堂医事雑誌」は実地の症例報告集であることで価値がいっそう大きい。

その創刊の初めに佐藤尚中が序文を書いている。「余癸酉の春職を解き医院を設けて専ら治療を事とし、曾て試みし事とも復ひ行ひけるに幸に治術を乞ひくる者多く、をさをさ更に得る所なきにあらねと、いかにせん学浅く術拙くと自ら羞ることもまた微くなからずなんある」とまず医院を東京で開いたが、病気の治療にあたり自分の力が足りないことを嘆く。

つぎに養子の佐藤進がベルリン大学で「医学の予科より初め本科をを残さず脩し尽して終に学士の允可を受得たり。こは未曾有の事にて亜細亜人にて嚆矢とそすへき。さるを猶飽たらて更に維納(ウィーン)巴里(パリ)を巡曆し、彼の大学士大医先生なと面語討論しつつ日々に名療奇術を目撃して帰つるなり。されはにや其論する所の医法と施す所の技術とは我耳目に新たにして後生のために裨益なしとすへからず」とあり、この文で尚中は順天堂の外科を進にゆだねて、自分は外科から手をひいて、むしろ内科の研鑽にすすむ気持ちがみられるようにおもう。

序文の終りには進が論ずる医法と施す所の新しい技術を「門生某等側にありて、それを棄置かんは

遺憾の事とし筆記して冊子となしぬるを順天堂医事雑誌と題して木に上せぬ。されは今より編をなしぬる毎に次刻して有志の輩に分たんとす。時に明治八年乙亥八日笠翁真逸佐藤尚中識」とある。

笠翁の称をいつから用いたか不明だが、明治3年に尚中が佐倉の岡本道庵にだした手紙にすでに「かさのや」と書いている。

順天堂医事雑誌は巻1(明治8年10月)、巻2(同11月)、巻3(同12月)、巻4(9年2月)、巻5(同3月)、巻6(同7月)、巻7(同9月)と約1年にわたり、7冊でたようである。佐藤尚中の蔵版で、発行者は東京馬喰町2丁目の英蘭堂島村利助である。

その間に佐藤進講義、門人筆記の「外科通論」が明治9年3月の板権免許、佐藤尚中蔵版でやはり島村利助の発行で出ることになり医事雑誌の刊行は止まったのだとおもう。しかし外科通論はその緒言にあるごとく「ウィーンの外科大博士ビルロート」の著わした外科総論が1874年に彼の地で出版されたのを「歐洲諸国各之ヲ訳出シテ以テ遵奉セサルナシ。是ヲ以テ余モ亦此書ヲ本資トシ、又親ク同氏ニ聞ク所ノ説及ヒ余カペルリン府ニ於テ師事セシ所ノ大家諸先生ノ論説ヲ取捨シテ以テ及門生徒ヲ教導スル…」というので、順天堂医事雑誌が症例報告集であるのと異なっている。

済衆録の翻訳と出版

当時の井上寅三、後の順天堂副院長佐藤佐の懐旧談を穴戸立三が筆記した「尚中先生並に順天堂医院創立の事」をみると尚中は明治8年の大病後は年々熱海へ養生のため湯治にでかけたが、下谷の根岸に別荘を求めてそこに住み、根岸から湯島の順天堂まで約1里を人力車で40~50分の道を通勤した。3と8の日は休み、その他の日は盛夏厳冬でも定刻(夏は7時、その他は8時という)までに必ず登院した。泊り込みの医局員や塾生が朝寝坊していたり、準備が整わないときも怒ったりせず、尚中は薬局で小使らと雑談をかわしたり、また薬局で調剤の手伝いをすることもあったが、丸薬を作るのが甚だ上手であったという。

根岸の別荘の増築が明治9年にはじまり明治11年に落成したが、それからは「病者に出先きまで付きまといわさるがうるさしとて此年より更に御転地を止まれと記憶す」とある。

明治10年西南の役のとき佐藤進は大阪臨時病院の長として出張したので、そのあいだ、尚中は留守居を兼ねて再び順天堂の表二階に住み、病軀を押してすべての病院事務をみたのである。

また中野操氏の医事大年表によれば明治8年にできた東京医学会社には尚中が、松本順、林紀、杉田玄端、長与専斎、戸塚文海、佐々木東洋、松山棟庵、石黒忠恵、三宅秀、隈川宗悦らと名を列ねている。この医学会社は医学および医政を談じ合い講究するのを趣旨としたもので、今日の医師会と医学会とを混ぜ合せたごときものとあるが、病気がち（おそらく肺結核）の尚中がどれだけの熱意をそれに注いだかは疑問である。

同じ医事大年表の明治11年12月2日の項には「東京府ニ医業取締ヲオキ職務心得ヲ達ス。取締員ハ長谷川泰、牧山修卿、小林恒、佐藤尚中、隈川宗悦、安藤正胤、松山棟庵、石井信義ノ8名ナリ」とある。

尚中はそのころは精魂を傾けてドイツのニーマイエル Felix von Niemeyer (1820-71) の内科書 *Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie* (2巻より成り、初版はベルリンにて1858-61刊) を蘭訳本から翻訳する仕事に没頭していた。

それより前に京都の新宮凉民と新宮凉閣が共訳した本が仁墨児（ニーメル）内科則と題して明治5年9月の官許で京都の書店から発行されはじめた。やはりニーマイエル内科書を蘭訳本を介して訳したもので、尚中はそのことを知ったであろうが、いっそう完全なものを求めて己れの道を進んだのでないかとおもう。いま順天堂大学に蔵する仁墨児内科則（新宮）は二揃いあるが、共に初編の第1、第2の2冊のみで、内容は呼吸器病のうち咽喉の部のみで、それ以上何冊まで出たのか明らかでない。一方、尚中はこの翻訳に最後の心血をそそぎ、呼吸器から循環器、さらに消化管の終

りまで14冊を成しとげて遂に病にたおれた。

この内科書翻訳は済衆録という題名で明治12年2月27日の著作権免許の活字本として出版がはじまる。翻訳兼出版人は本郷区湯島5丁目10番地の佐藤尚中であり、発行書林は日本橋区馬喰町2丁目5番地の英蘭堂島村利助である。何冊でたのか不明だが、いま私どもが見うるのは巻1から巻6までと巻8、巻10、巻12、巻14の10冊である。14冊までは少くとも出版されたとおもう。巻14の奥附には明治14年3月17日著作権免許とあり、出版は同15年10月とあるので、尚中の死後に出版されたわけで、そのため翻訳者は佐藤尚中、出版人は「本府平民、佐藤進、本郷区湯島5丁目10番地」とある。進は分家したから東京府平民であったので、後に士族をこえて華族に列し男爵となる。巻12は明治14年12月1日の出版とあるから、尚中の生前にできていたはずである。

巻1から巻6までは呼吸器病編であり、巻8は血行器病編の第2、巻10、12、14はいずれも消化器病編の第3となっている。

甚だ貴重なのは尚中自筆の済衆録原稿の一部がいま残っていることで、巻3、巻4、巻5（以上は呼吸器病編）、巻10、巻11、巻12（以上は消化器病編）の6冊である。原稿用紙には上方に笠翁随筆、下方に済衆精舎蔵と印刷されていて、尚中独特の達筆で万葉がなが沢山使われている。朱筆で沢山の書入れがあり、印刷出版されたものはその朱筆の訂正に従い、変体まじりの平がながみな片かなに直してある。

原稿巻3の初めに「戊寅11年2月7日熱海起稿」とあり、終りに「明治11年2月16日熱海客舎にて筆を絶ちぬ」と共に墨で書いている。すなわち熱海の旅館で10日間にこの60枚余の原稿を書いたことになる。もちろん訳文の草稿がすでにあってそれを清書したのだとおもうが、そのあとも朱で直したり、用紙の継ぎはぎをしたり、実に綿密な推敲である。その訂正は熱海の10日間には属さないとすれば、これでは保養でなく、大変な勉強のため温泉地に滞在していたことになる。

原稿巻4の初めに戊寅3月起稿と墨書し、熱海

と書いてないので東京での仕事かとおもう。その上方に「己卯2月6日校」と朱書し、終りに「己卯2月17日於熱海客次稿完」と朱記している。明治12年の2月に熱海で巻4の改正を果したことがわかる。

また巻10（消化器病編第3）の初めに「庚辰（明治13年）2月25日起稿」とあり、熱海と書いてないからおそらく根岸であろう。そして巻12（同じく消化器病編第3）の終りに「7月20日畢」とある。年を記してないが、たぶん同じ13年とみて、巻10～巻12の原稿清書に5カ月近くを要したことになる。

いま本学に蔵するニーマイエルの内科書（2巻より成る）の第10版（ベルリン、1879）をみると、原著者チュービンゲン大学の教授 Felix von Niemeyer の没後にギーセン大学の内科教授 Eug. Seitz が改訂したものであるが、全体の記載順序はニーマイエルの原著と変っていないとおもう。尚中の済衆録巻1より巻14まではこのドイツ書第1巻の大部分（ニーマイエル内科書の第10版第1巻は842ページあるが、そのうち第706ページまで）に当たっている。

済衆録の巻1は呼吸器病の第1編喉頭病、巻2は同じく第2編気管および気管枝病、巻3、巻4、巻5は呼吸器病の第3編肺質病、巻6は同じく第4編と呼吸器病付録（鼻内病）でニーマイエル内科書の順序と全く一致する。

上に述べた尚中自筆の済衆録原稿6冊はいわゆる決定稿で尚中がこれを印刷者に渡したものに違いない。ところが私どもはその前の段階の翻訳草稿というべきものをみつけた。順天堂大学蔵書番号20,185の紐黙児医経（ニーメルいけい）と同じく番号21,997、と21,998の合せて3冊である。

前者すなわち第20,185号は僅か10枚の原稿用紙を綴じたものであるが、おそらく尚中の自筆であり、「紐黙児医経巻一、呼吸器病論、喉頭病論第一」で始まり、本文の最初にカタルレ（炎症）の説明がある。明らかにニーマイエル内科書の冒頭の部である。10枚だけ訳文を書いたが、そこで中止したとおもわれる。用紙に医学所と印刷されて

いるが佐倉の医学所か東京のそれか決定できない。東京の医学所は明治2年の2月に医学校と改称した。尚中が大学大博士となり東京に移って大学東校を主宰したのは明治2年12月からである。医学所と印刷された用紙がまだ残っていたことは充分考えられる。何年の執筆か不明だが、この内科書翻訳の出発点を示すごとくおもわれる。

第21,997号と第21,998号は共に部厚な和綴じの本で、尚中の自筆に違いない。そして誰れの筆か「佐藤大博士自筆、笠翁随筆、二冊」と書いた紙片が挿入されている。そのためか図書目録でこの2冊本の題名が笠翁随筆となっている。笠翁は尚中の号であるが、決してこれは随筆ではない。古医書目録（1970年、順天堂大学図書館）をつくった鍋島氏がすでにその説明として「済衆録の一部か」と書いたのが正確であって、ニーマイエル内科書翻訳の草稿に他ならない。

その原稿用紙の大部分が上部に笠翁随筆、下部に済衆精舎蔵と印刷されている。また少部分ながら外科医法や医学所と印刷された用紙も混じている。佐倉時代に大量に作った原稿用紙を尚中は東京において使用したのであろう。

仁墨児内科則の題言と済衆録の序文

同じくニーマイエル内科書を京都と東京で翻訳し出版を企てたことが興味があるので、同書同版であったかを調べるために両者の序文を較べてみる。

新宮涼閣が明治5年の秋8月に書いた題言は「此書は高ドイツのチュービンゲン大学校病理治療督学内科総裁ヘリキス・ニーメルの著述にしてプロイセン国都ベルリンの鏤行第7版を和蘭医士イ・ゼーマン（依・斎満）その国語に翻訳し、1869年チール及びアムステルダムにて鏤刻第2版なり。題して病理治療目論学則（殊着眼活理及病理之解剖）と云う……」とある。

尚中が済衆録巻1の最初に書いた序文は「此書はドイツ国チュービンゲン大学の医学総裁兼博士教頭ヘリキ・ホン・ニーマイル第7鏤の著書を和蘭国博士イ・セーマン国訳してアムステルダムに於

て紀元1867年刊行せる者を更に重訳せる医経なり。……」とあり、上記の涼閣の文と比較すると、出版の年と場所に少し違いがある。

「日本に所在する蘭書目録」をみると、ニーマイエル内科書をセーマンが蘭訳したものは今も京都大学と金沢大学に残っているようで、題名は、両者ともまず *Leerboek der bijzondere pathologie en therapie, vooral met het oog op physiologie en pathologische anatomie. Naar den zeventen Hoogduitschen Druk* までは同じでその後が若干ちがって、題名の終りの *vertaald onder toezigt van Dr. J. (J.) Zeeman* (カッコ内の J. は金沢本のみにある) が一致する。これで見ると J. Zeeman (1824-1905) が自ら訳したというよりは、翻訳の監督者であったことを示す。そして金沢本に *Tweede Druk* (第2版) とあり、発行場所が *Tiel en Amst.* とあるが、京都本には第2版の語がなく、発行場所は *Amst.* とだけある。2巻からなり、1868, 69年の発行であることは一致する。これで見ると、東京の尚中と京都の涼閣らが完訳を企てたニーマイエル内科書のセーマン蘭訳本は同書同版でなく、若干ちがったものであったとおもう。

尚中の序文の終りの部は「近頃宿疾の為に世に交はること能はず。僻邑に逸居し意適すれば案に倚り筆を弄して纔に此書を訳出し是を済衆録と名づけて鏤行せり。済衆とは余曩時書を読みて吾道を講ずるの所、聊か亦此書に冠して以て余が素意を表す。時に明治12年3月、幽遂居の南軒に於て、笠篤真逸佐藤尚中識」

病気のため世に交わるのを避けて、当時は田舎である根岸の里でのんびりと暮し、気持が向けば机に向ってこの翻訳の筆を執ったというが、元気な人ががんばっても到底やれない大事業である。その勤勉さは実に驚くべきものである。済衆録と題したのは尚中が前に佐倉で書を読み医の道を講じた所すなわち済衆精舎の称と合せたものとはっきり述べている。遂居(スイキョ)の遂は「遠い郊外の地」の意である。

尚中自作の長唄「鄙の室」

尚中は学問の上で非常にすぐれた頭脳を発揮し、多くの業績を残したが、趣味も甚だひろく、特に長唄を好み上手であったという。三味線を甚だ好んだといわれる。若いとき寺門静軒の門で学んだことも、静軒が江戸繁昌記を著わして幕府の忌諱にふれたのと考え合せて、いくらか関係があるかも知れない。

尚中自作の長唄として「鄙の室」が今でも知られている。作者の名は笠廼那保とあり、「笠の」は尚中こと、那保(なほ)は妻の名であるから、夫妻の合作を意味するかとおもう。明治10年5月の作であり、尚中一家は根岸の別荘に住み、その家が増築の途中であった。

「ここは名にあふ吾妻なる忍が岡のかたほとり、しぐれの里に地をしめて、浮世をすますわが住居(すまい)……」ではじまる。忍が岡は上野の丘だから根岸の家が粗末であることを意味するとおもう。「昔の栄花をうち捨て、ひとり書籍を友ちどり、はまの真砂のかずかずを撰(えら)んでぞあみなせる、筆のいのち毛尽るまでこころまろばぬ有様の、ゆけどひかれずとどまれとなずまざるこそゆかしけれ……」は尚中がニーマイエルを訳して済衆録を作っている苦心は表わしているとおもう。

終りの方にある「アラおもしろや桜かざして舞振り姉も妹もいちやうに……」の姉妹は娘の楽(らく)と梅尾(うめお)がこの長唄に合せて舞うのを尚中らはうれしく眺めたのだらうとおもう。作曲は杵屋東成(勝三郎)となっている。尚中の晩年の生活ぶりがおおよそ推測できる。

逝 去

明治15年7月23日に尚中は数え年56才で逝去した。松尾耕三の「近世名医伝」(明治19年)の尚中伝は谷中に建つ顕彰碑の文(川田剛撰)に大体準拠しているが、ここで「近世名医伝」から尚中の最後のところを引用しておく、「明治15年、肺を病んで遂に起たず、初め咯血を患す。独り北郊の別墅に居る。少間あれば則ち力めて事を病院に

視る。或るひと之を諫止す。則ち曰く、衆人命を我に託す。寧んぞ吾が身を顧る暇あらんや。幾くもなく疾益すます劇しく、竟に歿す」とある。前に官を辞したとき位記を還納したが、歿するに及び勅して復た従五位に叙された。「蓋し特旨と云ふ、尚中は性沈毅、事に臨みて勇往、百折撓まず。生平、医道を振興するを以て己の任と為す。嘗て曰く、論精にして術粗なるは学者の通弊なり、而して外科尤も甚しと為す。能く之を矯する者、吾れ

に非ずして誰ぞ、其の自負する概に此の如し。即ち其の卵巣截除および造鼻諸術の若きは、実に本邦外科の権輿たり矣」とある。

尚中は没後3日にして谷中墓地に葬られたが、その柩を送った達官名士は3千人に及んだと川田剛の撰した碑文にある。門人の数も3千という。翌明治16年には谷中墓地に大きい顕彰碑が門人らの拠金により建てられた。その場所は彼が晩年に住んだ根岸の里にごく近いのである。

てがみ

順天堂医学雑誌が卒後教育の唯一の場とっております。夏の講習会には出たいと考えていても実現は困難です。そこで体育学部でおこなっているように地区別の講習会は出来ないものでしょうか。大学はかなり専門別に区分され、われわれ general practioner との距離は遠くなるばかりのような気がいたします。アメリカでは専門家の分離が強調されていましたが、最近その反動で再び generality を重視しようとする動きがたまっていると聞きました。日本の臨床医学では専門家の要求度はまだまだ少なく、しっかりした一般医の育成にも力を注ぐ必要があります。一般臨床の強をつけた上で(これには4年位はかかるでしょう)、専門家を志す人はさらに4年位専門課程を深く研鑽し、専門医の看板をかけて診察料金も一段と高いというような時代にならなければ、専門医の目的を達することが出来ません。順天堂大学が全国にさがけて専門別の組織にしたことは教育の為にはすばらしい前進といえますが、この卓越した

組織を卒業教育にも及ぼして頂きたいと念願しております。

S.M. 生

御意見有難く拝読いたしました。順天堂医学雑誌が卒後教育のテキストになるように編集委員は考えております。多忙な日々を送っている第一線の臨床医家が、一寸ひもといてみる本が診察台の横にあると本当に便利なものです。そのような形にもってゆけないだろうかと思いついておりませんが、医学雑誌という内容も硬く、寝ころんで読む本の形ではなくなってしまうことが多いものです。

編集委員としては読者よりのいろいろな御意見を頂いて、これを実現しようと考えておりますので、臨床例について、あるいは EKG の読みについて、小さなことでも、どしどし投書、御手紙を出して下さい。

順天堂伊豆長岡病院副院長(内科)

内藤 聖二